

ここにおいて、どこまで遠くに行けるか
——「野口里佳 不思議な力」展アーティストトーク

石田哲朗

東京都写真美術館 学芸員

ここにおいて、 どこまで遠くに行けるか

——「野口里佳 不思議な力」展
アーティストトーク

石田哲朗

はじめに

本稿は東京都写真美術館で開催した「野口里佳 不思議な力」展に関連して行われたアーティストトークの内容を編集したものである。「不思議な力」展（会期：2022年10月7日-2023年1月22日）のコンセプトや展示構成は2017年頃から少しずつ進行していったが、その中でコロナ禍における開催時期の見直しもあり、最初の立ち上がりから実に5年もの時間をかけてゆっくりとできていった。最終的に「不思議な力」という展覧会に結実するまでの、作家と本展企画を担当した筆者とのやりとりと、作家の思考とプランが変遷していくプロセスが、このトークイベントでは語られている。

野口里佳という人は行動しながら、作りながら、「だんだん見えてくる」タイプの作家である。そのプロセスを見ていくことは、創造の秘密、言い換えれば、作家の想像に富んだ思考とその周囲に生まれる独特のダイナミズムを理解することでもある。いわば、それこそが野口里佳にインスピレーションを与える「不思議な力」の本質と言えるのではないだろうか。このトークイベントと展覧会が終了して1年経ってから、ようやく筆者はそのような気づきを得ることができた。

なお以下のトークで言及される野口里佳作品の図版については、主に同展の展覧会カタログをご参照いただきたい。

❖1 「野口里佳 不思議な力」赤々舎、2022年。

「絵を描いてください」

石田哲朗（以下、石田）：今（2022年）開催している「不思議な力」展のお手本になるイメージは、2020年にDIC川村記念美術館で開催された「ふたつのまどか—コレクション×5人の作家たち」展で野口さんが手がけたインスタレーション展示です。ちょうどコロナ禍にあって閉塞感を抱いていたところだったので、私はこれを見てもすごく救われた気がしました。何か、心が軽くなるような。こんな展覧会を作ることができないかと思って、野口さんと色々話をし、今回の展覧会が実現できた。野口さんは、今回の展覧会をまとめる上で、どんなことを考えましたか？

❖2 「ふたつのまどかーコレクション×5人の作家たち」展、DIC 川村記念美術館、2020年。福田尚代、野口里佳、渡辺信子、杉戸洋、さわひらきの5名の出品作家によるグループ展である。

野口里佳（以下、野口）：最初は今までの作品の中からどんなものを見せたらいいのかよく分からなかったのですが、でも新しい作品を作り始めたら自ずとわかっていくだろうと思って、（本展のための）新作に向かっていきました。石田さんから私が DIC 川村記念美術館で行った展示のような展覧会を作りたいとお話があり、今自分が進もうとしている方向が間違っていないんだなと感じて、そこから考えを深めていきました。ご覧になっていない方もいると思うので、スライドで「ふたつのまどか」展をお見せしたいと思います。これは5人の作家が、DIC 川村記念美術館が持っているコレクションの中から自分の好きな作品を選んで、その作品と自分の作品を交えた展示を作っていくという展覧会でした。美術館の収蔵作品の中から好きな作品を選ぶというのはものすごく贅沢な体験で、最初収蔵庫に呼ばれて、美術館の持っている作品を一通り見せてもらって、とても楽しい始まりでした。私はその時にジョアン・ミロの作品を選んだのですが、（スライド）これが選んだ作品です【図1】。ミロは晩年スペインのマヨルカ島に住んでいたんですが、そのマヨルカ島に私も何度か行ったことがあったんです。今私は沖縄に住んでいるんですが、その前はベルリンに12年ほど住んでいて、ベルリンから近かったんですね。ミロが住んでいた敷地に今は美術館が建っていて、ミロが住んでいた住居やアトリエも残っています。そこに何度か足を運んだことがあり、写真を撮っていたこともあって、ミロのアトリエの写真、ミロの暮らしたマヨルカ島の風景、展覧会のための新作、それから私の描いた絵を中心に展示を構成していきました。この時に私がこの展覧会のために作った作品が〈アンテナ〉という写真のシリーズです。〈マヨルカの空〉という写真作品はタイトルの通りマヨルカの空、そして今回展示している《アオムシ》という映像作品とクマンバチの写真作品を展示しました。（スライド）これはクジャクが飛んでいるところの絵です。私はこの時初めて美術館の壁に絵を描いたんですが、なぜ絵を描くことになったかというと、マヨルカにあるミロの住居の壁にもたくさん絵が描いてあつ



図1 ジョアン・ミロ《コンポジション》（1924年、DIC 川村記念美術館蔵）と野口里佳作品の展示風景
「ふたつのまどかーコレクション×5人の作家たち」展（DIC 川村記念美術館、2020年）展示風景
撮影：木暮伸也、金井佐和子 Photography: Kogure Shinya, Kanai Sawako

て、その壁の写真を展示することにしたので、その壁の絵の続きを描いてみようと思ったのがひとつ。それから（ミロの絵の中で）右側に飛んでいるふたつの生き物は、一体何だろうということはずっと考えていて、考えているうちに、下の葉っぱのような生き物はもしかしてアオムシなんじゃないかと思って、まずは《アオムシ》という映像作品を見せることにしました。それから（絵の中の）左側にいる生き物はさて何だろう、と考えているうちに、これはもしかしてクジャクなんじゃないだろうかと思ったんです。それで、飛んでいるクジャクが撮影できないだろうかと考え始めて、クジャクを撮影しに行くことにしました。何度か撮影には出かけたんですが、結局展覧会までに飛んでいるクジャクの写真は撮れなかったので、頭の中で思い描いていたクジャクの飛ぶ姿を壁に描いたんです。この展示を見た石田さんからの最初のリクエストが、「今回の展覧会でもぜひ壁に絵を描いてください」ということだったので、びっくりしました。写真美術館の展覧会で、最初に絵のリクエストが来るとは思わなかったので、石田さんなかなかすごいな、と思いました。

石田：写真作品を決める前に、「絵を描いてください」とお願いしたんですって？

野口：そうです。「今回も描きましょう」って。私は「え？ 写真美術館ですよ？」と返事をして、そこから具体的な展覧会プランの話が始まったのだと思います。その石田さんからのリクエストをきっかけに、私の中でもイメージが広がり始めました。川村の時には実現できなかったクジャクの写真を何とか撮ろうというのがひとつ。それからもうひとつは空とぶ魚の写真。あの頃私は大分県の国東半島に通っていたんですが、国東半島でたまたま、ボラがとんでいる瞬間に出会ったんです。「え？ ボラってとぶの？」って驚いていたら、周りの人たちが普通に「とぶよー」と言うんですよ。「え？ そうなの？ ボラって普通どこにいるの？」と聞いたら「どこにでもいるよー」って言うし。それからずっとボラのことを考えていて、その頃ちょうど東京に来る機会があったので、石田さんと話をして、「今回の展覧会は『ボラ、クジャク、クマンバチ』っていうタイトルにしようと思うけど、どうでしょうか」と訊いたら「それはすごくいい」って言うので、その時はもう展覧会ができたような気持ちになりました。

石田：全然時間がない時にたまたまいらっしゃって、たしかここ（トーク会場）の、ロビーで会うなり、「ボラ、クジャク、クマンバチ」と書いたメモを。

野口：そうでしたね。「タイトルが決まった」と言ってメモを見せました。石田さんから即答で「それはいい」と言ってもらったから、「つかまえた」という感じで、私の中では展覧会が具体的に立ち上がり始めて、それから私のボラを探す旅が始まりました。ボラの事を調べ始めて、国東に通わなきゃいけないかなって思ったけれど、

「ボラのために国東に通うのか？」と。「どこにでもボラはいるんだっ
たら沖縄にもいるんじゃないか」と思って。ちょうどコロナ禍だっ
たこともあり自分の家の近くから探し始めました。ボラの事を調べ
ていたら、どうもボラは海水と淡水が混じり合っているところだと
ぶらしいと聞いて、Google マップで海水と淡水が混じり合ってい
そうなところを探しては、自転車で行ってみたい、車で行ってみた
り、ボラを探す日々を送っていました。けどボラはとばない。もし
かしたらちょっと前にはとんだのかもしれないけど、今はとばない。
で、朝だったらとぶのか、夜だったらとぶのか、みたいなことをずっ
と毎日やっていて、魚釣りをしている人に「こちらへんでボラを見
たことがありますか」と聞くと「ボラなんかどこにでもいる」って
誰もが言うんですね。「とんだのは見たことないか」って言うと、
「うーん、一週間ぐらい前にとんだかも……」って感じで。一週間
に一度とぶかどうか分からないボラをどうやって撮ったらいいか分
からない。そうこうしているうちに、ボラを撮ることのハードルの
高さがようやく分かり始めて。調べていると、四国の川でボラがた
くさんとんでいる情報とかは出てくるんですけど、でも不要不急っ
て言われているときに、四国までとぶかどうか分からないボラを探
しに行っているのかどうかって考えはじめたら、「私のやってるこ
とって、すべてが不要不急だよな」って。ボラがとぶ心配のない水
面を見ながら、果たして「ボラ、クジャク、クマンバチ」ができる
んだらうかと不安になっていきました。これはちょっと考え直さな
いとダメなのではと思い始めて、違う作品に取りかかろうかと、石
田さんに相談したんですね。そうしたら「いや、何とかボラ、ク
ジャク、クマンバチでいけませんか」と言うし。

石田：タイトルの語感が良かったんで。呪文みたいな感じで。

野口：たしかに、私も「ボラ、クジャク、クマンバチ」って言うの
はすごく楽しくて、でも実際にはボラがとぶ瞬間になかなか出会え
ないし。だんだん分かってきたことは、沖縄はあんまり高い山がな
いので、海水と淡水が常に混じり合っているんです。海水と淡水が
出会う場所がないから、だからボラがあまりとばないのではないかと。
これはボラを沖縄で探すのは、ほぼ無理なんじゃないかという
気持ちになっていきました。でも「何とかやりたい」という石田さ
んの心の中ではもうボラがとんでいるんだ、って思ったら、やっぱ
り何とかしなければと思うし。その時私がやりたかったことは、ボ
ラとかクジャクとか、とぶのはわかっているけど、いつどこでとぶ
のかよく分からない。見たことがある人もたしかにいるし、多分魚
がとぶところってみんな一生に一回ぐらいは見ていると思うんです
よね。だけど実際に撮ろうと思うと難しい。多分私はそんな奇跡み
たいなことを作品にしたいと心の中で思ってたんです。だから簡単
に撮れないのは当たり前なんですよね。でも、今日も撮れなかった、
みたいな感じで、心の折れそうな毎日を送っていました。なぜそこ
に飛んでいる姿をよく見る「クマンバチ」が加わっていたかという
と、クマンバチって丸くて太っちょじゃないですか。だから航空力

学的には、あんな太っている虫が飛んでるっていうのはおかしい、なぜ飛べるのかが長い間謎だった、という記事を読んだんです。それで今回、クマンバチも加えることにしました。

不思議な力 父のアルバム

石田：今年（2022年）になってから展覧会タイトルを決めなくてはいけなくて。さすがに「ボラ、クジャク、クマンバチ」では、実際にはボラの写真はないから。なくてもタイトルがボラでもいいんじゃないかとも考えたけど、さすがにちょっとわかりにくいかな、などと話していました。

野口：その時石田さんが言っていたのは「じゃあボラは壁に描きましょう」「でもクジャクもボラも、どっちもないのはまずいかな」など。さすがにボラもクジャクも絵で描くというのはどうかという気持ちに私もなっていました。新作以外に、今までの作品からどういったものを選んでいくかという課題もあって、その時に「不思議な力」という2014年に作った作品のタイトルが浮かんできて、今回やりたいことに一番ふさわしいんじゃないかと思い展覧会のタイトルに決めました。

石田：でもその時すでに実はクジャクの写真は撮れていたんですよ？ スライドも用意しているので、こちらへんで会場写真を見てください。これがまず展示室に入って最初の部屋ですね。作品シリーズ〈不思議な力〉の展示です [図2]。

野口：これが2014年に作った作品〈不思議な力〉です。当時子供が生まれて、思いついた時にどこかに撮影に出かけるということが



図2 「野口里佳 不思議な力」展（東京都写真美術館、2022-2023年）展示風景 野口里佳〈不思議な力〉
撮影：高橋健治 Photography: Takahashi Kenji

なかなか難しかったです。さあどうやって作品を作っていこうかと考えた時に、台所でふと「目の前にも色々な宇宙があるよな」と思ったんですね。実は今いるこの場所にも色々な力が働いている。重力があって、浮力があって、でもそれは全然見えない。「見えない力というのはあちこちにあるんだ。台所の中にある宇宙みたいなものを形にできないだろうか」と思って、それで始めたのが〈不思議な力〉というシリーズでした。見えない力を見えるようにするために小さな実験を試みた、そんなシリーズです。

……（スライドを送りながら）これは表面張力で紙がコップにくっついてるところの写真です。これは、ハチミツが重力で落ちていくところ。これはプリズムを使って太陽の光を分けてみました。これは懐中電灯で照らすと指が細く映ったり、太く映ったりするっていうとても単純な実験です。こうやって見ると私がやっていることはすごく他愛もない実験なんですけど、ただ実験って、自分で実験しているとなかなか写真が撮れないんですよね。そこで結局、夫や娘に協力してもらって写真を撮っていました。これは今回の展覧会のために撮影した〈不思議な力〉シリーズの新しい一点です。このシリーズはもともと、2014年に発表した〈父のアルバム〉と一緒に展示するために作った作品でした。〈父のアルバム〉は、亡くなった父が撮影した家族の写真を私がプリントしたという作品です。2014年に浜松町のギャラリー916で初めて発表したんですが、この展覧会の前の年に父が亡くなって、父が残したフィルムを整理しながら暗室でプリントしていたんです。そんな時にギャラリーを運営していた上田義彦さんから展覧会のお話をいただいて、最近はこのことをやっている父のネガをプリントした写真を上田さんに見せたら、「ものすごくいい」と。「ぜひこの写真で展覧会をやりましょう」となりました。そこから、だんだん私が何をしようとしているのかということを考え始めました。916で〈父のアルバム〉を見せることにした理由のひとつに、上田さんが『at Home』というご自身の家族を撮った写真集を作られているということもありました。でもその本に載っているのは、上田さんの奥様の桐島かれんさんとお子さんたちなので、「さて私の家族が作品になるんだろうか？」という葛藤もありました。色々なことを考えながらプリントを作っていたんですけど、暗室で作業をしているうちにだんだん自分がやっていることの意味を私自身も理解していきました。この〈父のアルバム〉を発表するにあたり、父が遺したカメラで私も日常から作品を立ち上げるべきなんじゃないか」と思って、それで作り始めたのが〈不思議な力〉です。だから私にとって〈不思議な力〉は、私の家族写真という側面もあるなと思っています。今回写真美術館ではこの〈父のアルバム〉はその一部、8点だけを展示しています。（スライドを送りながら）どうも私の父は結婚してからカメラを買ったみたいで。最初は新婚旅行からフィルムが始まっているんですね。多分、新婚旅行へ行く時に電車の中で二人で写真を撮り合っている。これが私の母で、こちらが父です。これは私の父が育てていたバラです。これは私ですね。これは私と母。これは私で、これは弟です。

❖3 上田義彦『上田義彦写真集 at Home』
リトルモア、2006年。

石田：今回ちょうど写真集が出ましたが、シリーズ全体では小学校卒業までをプリントされたんですね。^{❖4}

❖4 野口里佳『父のアルバム』赤々舎、2022年。

野口：最初はそんなにプリントするつもりではなかったんですけど、実際にプリントしてみたらそれがすごく面白い体験で、気が付いたら私が小学校を卒業するところまでプリントしていました。そこで一旦プリントを終わりにして、『父のアルバム』という本を作りました。

石田：もちろん、もっとたくさんある中から、選んでプリントしたものですよね。

野口：そうですね。私はこの作品を、選ぶことについての作品だと思っています。父が生きていて、父が写真を選んだらこういう形にはならなかったと思います。父が見たものをもう一度私の目を通して見たことによって、ひとつの作品になっていった。〈父のアルバム〉は今までの作品の中では異色の作品ですが、この10年間やってきたことの中でとても重要な仕事だと考えています。今回はぜひ展覧会に入れたいなと思っていました。

札幌、牡鹿半島、スリランカ

野口：……(スライドを送りながら)この部屋はふたつの映像作品、《アオムシ》と《虫・木の葉・鳥の声》を展示しています [図3]。《虫・木の葉・鳥の声》は札幌にある SCARTS というアートセンターから地下の遊歩道上映するための作品を作ってくださいというお話があって、2020年に制作した作品です。最初の年は札幌のアーティ



図3 「野口里佳 不思議な力」展 展示風景、映像作品《アオムシ》、ドローイング《やんばるの森》、映像作品《虫・木の葉・鳥の声》(左より) 撮影：高橋健治 Photography: Takahashi Kenji

ストが作品を作って、翌年2020年に私と大木裕之さんがそれぞれ作品を作りました。これが上映している札幌の歩行空間です。見ていただければ分かると思うんですけど、すごく難しい空間で、とても明るいです。とても良いプロジェクターを使っているのでも、明るくてもある程度は映像が見えるんですが、でも歩行空間だから「立ち止ませちゃいけない」という規則になっていて。「それってどうなの？ 立ち止まりたいと思わない作品ってどうなの？」って思いながら制作しました。

石田：通路だから止まっちゃダメってということですよ。

野口：そうなんです。一応そういうことになっている場所で、4つのプロジェクターがすでに設置されているので、4面で展開する作品^{❖5}という前提があるところから作品を作っていました。今(2022年)でも毎日上映されているので、もし札幌に行く機会があればぜひひじめてください。

❖5 4面プロジェクションによる映像作品《虫・木の葉・鳥の声》(2020年)はSCARTS主催事業の西2丁目地下歩道映像制作プロジェクトとして制作された。「不思議な力」展では同作品は液晶モニターによる3面映像として展示された。

石田：これは、なかなか映像だけでは分からないですけど、コロナ中に、沖縄のやんばるの森で撮影されたんですね？

野口：はい。最初はせっかくだから札幌で作品を作りたいと思っていました。それで4面で展開していくなら何がやりたいかなと思った時に、昔札幌に行った時に夜間のスキージャンプ競技を一人で見に行ったことがあったんですね。それがすごく記憶に残っていて、「ぜひその4面を使って、向こうから、ふわっ、ふわって、スキーで人が飛んでくる映像が作れないかな」ということを考えていました。それで色々とリサーチしていく中で札幌のスキージャンプの少年団が快く引き受けてくれて、その少年団を撮影し始めたんですね。でも一度撮影をして「さあこれから本格的に撮影を」という時にコロナが始まったんです。それで札幌に通いづらくなってしまった。その年は暖冬で雪があまり降らなくてスキージャンプの大会が延期になったりしたこともあって、このままスキージャンプを撮り続けるのは難しそうだと判断して、それならば北海道の山の代わりに私が住んでいる沖縄の山に入ってみようと思いを始めました。それがこの映像作品です。次の部屋にあるのが《クマンバチ》という写真作品です。これは2019年に宮城県の石巻で行われたリポーンアート・フェスティバル^{❖6}という展覧会のために制作した作品です。この展覧会のためにしばらく石巻の牡鹿半島に滞在していたんですが、牡鹿半島ってものすごく虫が多いんですね。とくに大変なのがヒルがいるんです。牡鹿半島には鹿がたくさんいるんですが、鹿の蹄のところにヒルが入って色んなところに移動するらしいんです。だから森とか藪とか林とかちょっと奥まったところに入っていくと、必ずヒルがいるんですよ。ヒルって足とかにくっついて血を吸う虫です。虫に刺されないように虫除けスプレーはいっぱいしてたんですけど、ヒルに血を吸われないためには長靴をはいて、長靴とズボンの間にヒルが入らないようにガムテープを貼って。油断で

❖6 「リポーンアート・フェスティバル2019」展、会場：牡鹿半島、網地島、石巻市街地、松島湾、2019年。野口里佳の作品は牡鹿半島の鮎川エリアで展示された。

きないのは、ヒルは木の上にもいるんですよ。ヒルには体温センサーみたいなものがあって、体温を感知するととんできて、血を吸うらしいんですね。だからいつも完全防備で山に入っていたつもりなのですが、それでもヒルに血を吸われたりして。撮影に行くたびに虫との戦いみたいになっていました。毎回何かに「あ、また刺された……。」って。そんな戦いをしている中で私の唯一の楽しみが御番所公園という小高い見晴らしのいい海が見える公園でお昼のお弁当を食べることだったんです。なのにある日いつものようにお弁当を食べに行ったら、クマンバチがたくさんいるんです。前の日まではいなかったんですよ。何回も通っていてそれまでいなかったのに、急にたくさんのクマンバチがいて、最初の日には退散しました。そして次の日も公園に行ったら、まだいる。最初は私の憩いの場所なのに！って思ったんですが、でもまあクマンバチにしてみたら、自分たちの場所に私が勝手にやってきてるわけなんですよ。それにクマンバチのことを調べてみると、クマンバチはほとんど刺さないと書いてある。「あ、そうなんだ」って思って。「もう虫から逃げるのは疲れた。虫と向かい合おう。どうせだったら虫を撮ろう」と思って、この時から虫を撮ることにしたんです。この時は胃カメラを使ってクマンバチを撮影しました。なぜ胃カメラかというと、何年か前に私のカメラ友達から、ちょっと変わったカメラを手に入れたので「使ってみない？」と改造した胃カメラを渡されたんです。それでそのカメラをしばらく持っていたんですが、ずっと使い道が見つけられなかったんですね。それでクマンバチと出会った時にいよいよ出番がきたと思って撮り始めました。栗林慧さんという有名な昆虫写真家の方がいらっしゃいますが、最近栗林さんの本を見ていたら、胃カメラを改造して使われているのを見つけて「あ、私は間違ってたなかったんだ」って思いました。

そしていよいよとぶ魚の写真です。これはボラではないんですけども、念願のとぶ魚を撮影しました。これは、その時に蛇が泳いできたという写真です。そしてこれも念願の飛ぶクジャク。これは実は私を見て逃げていくクジャクなんです。沖縄の小さな島で撮った作品です。こちらはスリランカに行った際に、ジェフリー・バワ^{❖8}というスリランカの建築家の最高傑作と呼ばれているカンダラマという、ジャングルの中のホテルがあるんですが、そこに向かってる時に「飛ぼうとしてるんじゃないの!？」というクジャクを見かけたんですね。慌てて車を降りて、待っていたら飛んだ。その瞬間の写真です。

石田：クジャクが飛ぶのは、めったに見られないと聞きましたけれども。

野口：そうですね。スリランカに到着してすぐガイドの人に「私はクジャクが飛ぶところを撮りたいんだ」って言ったら、「そんなものはそんな簡単に撮れないんだ」と言われました。「私だって今まで一度も見たことがない」と言っていたので、滞在中に目の前でクジャクが飛んで、ガイドさんもビックリしていました。さらに今回

❖7 栗林慧 (1939-)

中国大陸（瀋陽）出身。長崎県在住。写真家。昆虫の生態撮影を中心にネイチャー・フォトの分野で1970年代以降、第一人者として活躍している。

❖8 ジェフリー・バワ (Geoffrey Bawa, 1919-2003)

スリランカ・コロombo出身。建築家。トロピカル・モダニズムの第一人者とされる。野口がここで言及しているのはバワが手がけたヘリタンス・カンダラマ（ホテル）のこと。



図4 「野口里佳 不思議な力」展のポスター

の新作について話すと、クジャクを撮るために、もう一度スリランカに行こうかと考えていたら、沖縄の離島のある島でクジャクが大繁殖しているという新聞記事を読んだんです。リゾートホテルの敷地内で飼われていたクジャクがいて、ある年台風でクジャク小屋が壊れてクジャクが脱走、その後島中でクジャクが繁殖しているという記事でした。「ええっ、そんな近くに野生のクジャクがいるんだ」となって、そこからその島に通い始めました。でも、結局「ふたつのまどか」展の時には、このクジャクの写真は撮れなかったんです。それから沖縄の島に通っている時に、ある本屋さんでラオスの布について書かれた本を見つけて、その本の中に、東南アジアに生息する「宇宙と交信する木」というのがあったんですね。「ああ、その木をちょっと見に行きたいな」って、ラオスに行くことを考えているうちに、ふと「もしかしたら、すべての植物は宇宙と交信しているのではないか」と思うようになったんです。それが〈アンテナ〉という作品になったんですが、その親戚のような作品《きゅうり》を今回（この展覧会の）ポスターにしました【図4】。

野口:(スライド) これは今回壁に貼っている私のドローイングです。

石田:(壁に直接描いている絵とは別に) こっちはスケッチブックなんです。

野口:そうですね。スケッチブックです。私の頭の中にある景色を

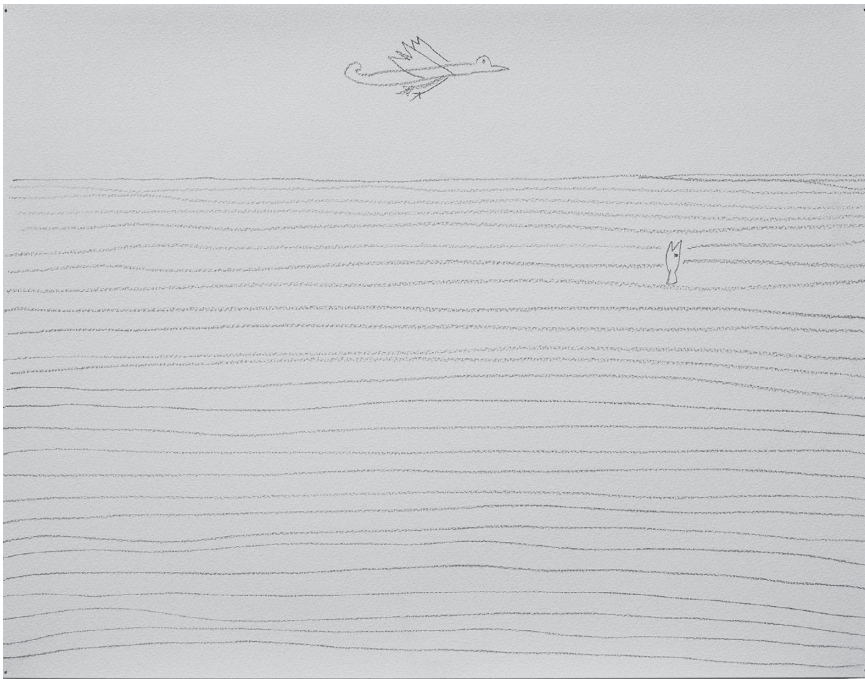


図5・図6 野口里佳によるドローイング「野口里佳 不思議な力」展より
撮影：高橋健治 Photography: Takahashi Kenji

描いたものです。もともと撮れなかった写真の「あ～あの時、シャッターが押せなかったな」という気持ちを消化するために時々スケッチブックに絵を描いていたんですが。これは先ほどお話しした「スキージャンプを撮る私」【図5】。こんな感じで撮影しようと考えていたっていう、そういう絵です。そしてこれは「私の夢」【図6】。というか、野望ですね。先ほどお話しした島に繁殖している野生のクジャクが、どうもその島から海を渡って飛んで行って他の島でも繁殖しているらしいんです。ということは海を渡れるほど遠くまでクジャクは飛ぶことができるということ。であれば海の上を飛んでいる間に空中でボラと出会っているかもしれない。その瞬間は写真

には撮れないんだらうなって思いながら描いた、私の夢の絵です。

《夜の星へ》、〈海底〉、《レスキュー隊》

野口：そしてその次の部屋に展示しているのが《夜の星へ》という映像作品です。《夜の星へ》は最初は写真作品として発表しました。私は2016年までドイツのベルリンに住んでいて、自分の自宅からスタジオまで毎日バスで通っていたんですが、ある日スタジオから自宅に帰る道のをバスの中から1本のフィルムで撮ったんです。その翌年、同じ道のを今度は映像で撮影したのが、今回展示している《夜の星へ》という映像作品です。

石田：これは比較的会場構成の早い段階から中央の部屋で《夜の星へ》の映像を流したいっておっしゃってましたよね。真ん中に夜の映像がくるっていうイメージはあったんですね。

野口：そうですね。この10年間で映像作品の数も増えてきたのできちんと見せたいなあというのがありました。《夜の星へ》は初めての長編の映像作品だったので、良い形で見せたいなあと思って、きちんと暗い部屋を作ろうというところから全体の構成を考えていきました。

石田：最初の映像作品っていうことですか。

❖9 「光 松本陽子／野口里佳」展、国立新美術館、2009年。

❖10 「夜の星へ」展、キャノンギャラリーS、2015年。

野口：2009年に国立新美術館で展覧会をした時に、短い映像作品を発表しました。それが最初の映像作品です。《夜の星へ》は初めて作った長い映像作品かなと思います。長いといっても20分程度ですが、この作品はキャノンギャラリーSで展覧会をすることになって、キャノンから最新のデジタルカメラをお借りしたんですね。^{❖9}「そのカメラは使っても使わなくても良いです」って言われたけど、デジタルカメラで何か作品が作れないかなと思っていました。でも一年お借りしたけどなかなか作品になっていなくて、そのままお返ししようと思って、「やっぱり展覧会はフィルムカメラで撮影した作品でやろうと思います」と話をしたら、「ええっ？」ってなって。1年もお借りしてたから当たり前ですよ。それでどうしようかと考えて、その時展示しようとしていたフィルムで撮った〈夜の星へ〉というシリーズを映像でなぞることにしたんです。それが今回の映像作品です。

これは最後の部屋に展示している〈海底〉というシリーズです。先ほど見せた〈夜の星へ〉シリーズの続きとして、夜の光のことを考えているうちに水の中を進んでいく光ってどんなのなんだろうかと思い始めて。じゃあちょっと夜の海へ潜ってみようと思って。最初は海の中を進んでいく光を撮るために夜の海に潜り始めたんですけども、やっているうちにだんだんと自分の中で〈潜る人〉という作品につながっていったんです。それで今回の展覧会の最後の部屋に、初期作品の〈潜る人〉と〈海底〉の写真を組み合わせて展示

をすることにしました。

石田：〈海底〉はシリーズの中でこの一点だけがバーンと展示されていて、その他はカタログの中にしかないんですよね。

野口：そうですね。カタログの中にしか存在しませんね。本当は〈海底〉をシリーズで展示することも考えたんですけども、石田さんから今回の展覧会で〈潜る人〉をぜひ見せたいというお話があって、考えているうちに、この〈海底〉の一点とつながっていったという感じです。

石田：あとまあ、この美術館は決して広くないので、もっと会場が広がったら〈海底〉シリーズもたくさん出せたのかなっていうふうに思います。

野口：そうですね。あと二部屋くらい欲しかったですね。二部屋とは言わず三部屋でもいい。もうワンフロアあってもよかったです。

石田：どうしてもなく広さの問題っていうのがあるので、点数は絞っていく。

野口：そうですね。絞って行って、ちょっと最後はみ出して、《レスキュー隊》という映像作品を展示会場の外で見せています。《レスキュー隊》は消防署の訓練の様子を撮った映像作品です。実は私の最初の作品というのが同じ消防署を撮った写真作品でした。大学生だった1992年につくった〈城を〉というシリーズの作品です。^{❖11}当時私は埼玉県大宮市（現さいたま市）に住んでいて、自宅からバスに乗って駅まで行って、そこから電車に乗って大学に通っていました。そのバスの中からいつも消防署の訓練の様子が見えていたんですね。時々ロープを渡っていく人の姿が見えるんですが、私にはすごく奇妙に見える。自分の日常で空中をロープで渡っていく人がいるなんてとても不思議なのに、誰も気に留めない。それがすごく不思議で、ある日、意を決して消防署を訪ねました。写真を撮らせてほしいと頼んだら快く、「どうぞ、どうぞ」といって消防署に入れてもらえて、署長さんが「じゃあ、これから練習見せますんで」って、一通り訓練の様子を見せてくれたんです。それは私にとって、カメラを持つことで新しい扉が開いた瞬間でした。今回ロビーに展示している《レスキュー隊》は、「さいたまトリエンナーレ2016」^{❖12}のために、何年ぶりかな、もう一度その消防署を訪ねて撮影した作品です。

石田：20年以上ですね。

野口：その時にいた消防士さんたちはもちろんもういないんですけど、でもこれ（学生時代の写真作品）を見て、「あっ、これ、誰それだ」って分かる消防士さんもいて。

❖11 野口が大学時代に制作した写真作品シリーズ〈城を〉（1992年）は野口里佳『創造の記録』roshin books、2017年に収録されている。

❖12 「さいたまトリエンナーレ2016」展、会場：さいたま市各所、2016年。映像作品《レスキュー隊》を含む野口里佳の作品は旧部長公舎で展示された。

石田：そういういわれもあるんですけど、ロビーに映像をと
ことで、展示の入り口付近なので、(順路の)最初から見えている。
最初はお客さんの反応を見ても「これ何？」って感じで。野口
さんの作品だということもあまり気づかれずに通り過ぎたりして。
でも会場を一周まわって〈潜る人〉を見たあとで、何かやっぱり、
つながっているような感じ、最初見た時と見え方が変わってくる
と思いました。

野口：そうですね。私自身もあまり意識はしていなかったんですが、
展示を見ていくと、時間を遡っていくというか、〈潜る人〉があっ
て、さらに私の最初の作品につながっていくところがあって、私
自身も思いがけないつながりが、この展示によって生まれているな
と思っていました。

石田：それは偶然というか、やられてみたところ何かつながりがある
と分かった？

野口：はい。私は作品を作るときにはユーモアがとても大切だと思
っていて、初期の私の作品にはユーモラスな作品が多いと思うん
です。でもだんだんと自分の作品からユーモラスな部分がなくなっ
ていたなと思っていて、でも DIC 川村記念美術館で絵を描いた時
に、絵には私のユーモラスな部分が出やすいと思ったんですね。私
のおかしな部分が出しやすい。だから「絵」によって、また新しい
扉が開いて、それによって〈さかなとへび〉とか〈クジャク〉の写
真が出てきたんじゃないかなって、思っています。そういった意味
では、最新作と《レスキュー隊》もつながっているなと思っていま
す。《レスキュー隊》は映っている人たちの動きそのものが面白い
というか。私の中にどこか、みんなをちょっと笑わせたい。大笑い
させたいわけじゃないんだけど、ちょっとクスッてさせたいという
気持ちがあって、作品がそういう要素を含んでいたらいいなとい
つも思っています。

だんだん分かっていく

石田：展示全体を見ていても、色んな発見があるというのは、多分、
制作年代順ではなく、連想が広がるという感じで会場ができてい
るからかなと思います。

野口：そうですね。自分の中でも最初はぼんやりしていて、それが
どうしたことなのかというのは展覧会を作りながら見えていく、だ
んだんクリアになっていく。

……(スライド)これが今回展覧会を作るにあたって、私が作っ
た模型【図7】です。

石田：ほぼ、このまま実現してますよね？ 大体。

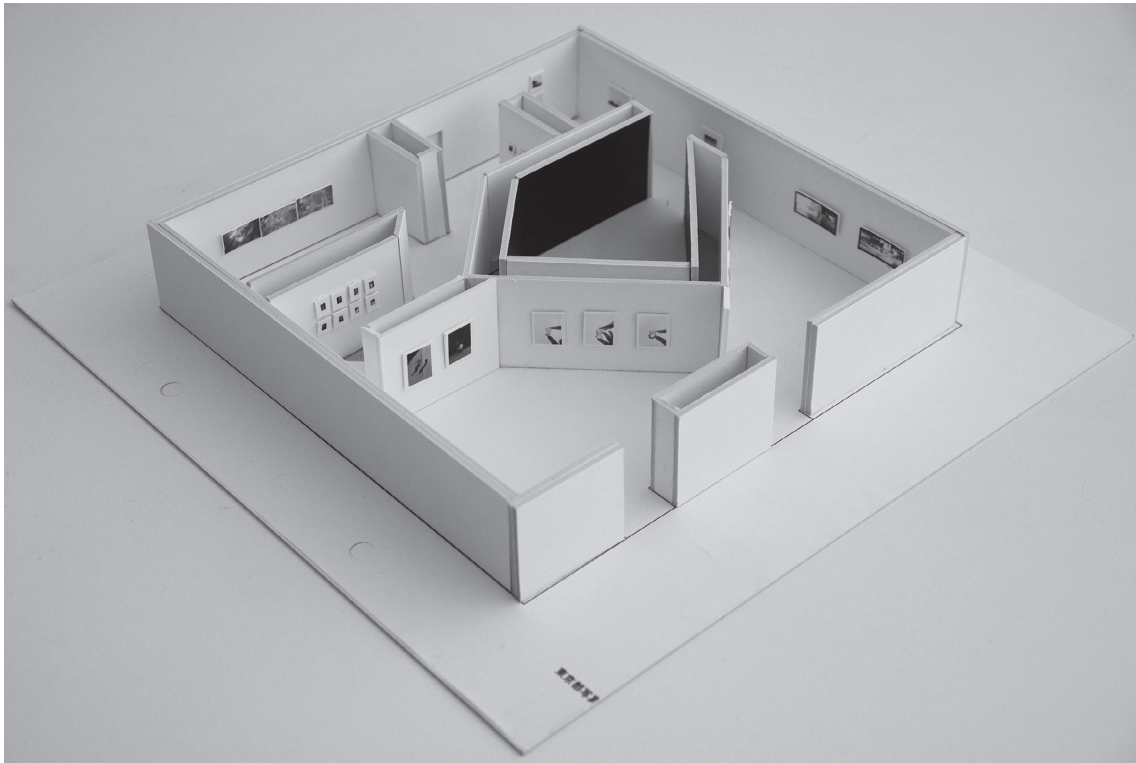


図7 「野口里佳 不思議な力」展の展示模型
撮影：野口里佳 Photography: Noguchi Rika

野口：壁の立て方とかはほぼ実現してますね。私は図面だけで考えると消化できないところがあって、ぼんやりと自分の中で形になっているものを一回立体に置き換えて、手を動かしていくうちに、この模型の中を自分が歩き回ってだんだんと展示が見えていきます。私は大体展覧会を作るときというのは模型を作るんですが、頭の中にあったものをパッと出したのがこの模型という感じです。

石田：その空間とともに並べる作品もイメージがあるとか？

野口：ある程度はイメージを固めてから模型を作って、これ、とてもちっちゃい模型なんですけど、作ってからも、小さい模型の中でピンセットで写真を並べ替えたりして。まあ何回もやり直しをしたりしながら細かいところは作っていく。でも最後は美術館で、現場でできていきますね。

石田：ところでこの展覧会のカタログには、野口さんの作った展覧会場の模型の写真と、それから「ここにいる、どこまで遠くに行けるか。」という、すごく印象的な一文が入っているんですね。この文章は、実はかなり展覧会準備の最終段階になって出てきましたね。

野口：そうですね。

石田：なんか、もっと早く出てくればよかったなって。実はこの一

行が展覧会全体を物語っているような気がして。この言葉を紹介したかったんです。

野口：石田さんに「もっと早く言ってくれたら、テキストだってもっと違うこと書けたのに」と言われて。本当にそうだなと思ったんですが、でも私自身も展覧会の準備を進めるうちによりやく言葉にたどり着いた感じなんです。展覧会に向かっていく中でだんだん分かっていく。だんだんクリアになっていく。だんだんとなんです。でも「先に言ってくればよかったのに」と言われたのは嬉しかったです。最初から私分かったかのように石田さんが思われたんだな、と考えたら、それはそれですごくいいことだと思ったんです。私も最初はわかってないんですよ。なんか自分の行きたい方向は分かっている。どこにたどり着きたいのかも、ぼんやり分かっている。でも言葉にはできていないんです。この言葉をカタログの最後に書いたのは、展覧会とカタログって同時に作っていくんですが、カタログができていく過程の中で石田さんと吉本ばなな¹³さんにテキストを書いていただいたんですけれども、吉本ばななさんは私の人間性みたいのところを書いてくださっていて。石田さんは今回展示している作品の背景のところを書いてくださっていて、でもまだこの本には何か足りないぞって思ったんです。それで「やっぱり私が今何をやろうとしているのかというのをきちんと書く必要があるんじゃないかな」と最後の段階で思ったんですよ。何か足りてないんじゃないかと考えているうちに、新作ができて、プリントが出来上がっていく中で、ようやくはっきりとした言葉になったという感じで。この「ここにいって、どこまで遠くに行けるか。」というのは、コロナ禍になって、色んなところに行きづらくなりましたよね。私はそれまで沖縄に住んで、そこから色んなところに出張に行くのが日常でした。色んなところに作品を作りに行ったり、展覧会を作りに行ったりして日々を過ごしていた。けれどコロナになってずっと沖縄にいなきゃいけなくなって、最初はすごく新鮮だったんですね。最初の一年は身の回りで作品を立ち上げることってというのが楽しいし、これが今やるべきことなんだな、って思いながらやっていました。でも2年目になったらだんだんつらくなってきて。もちろん身の回りの世界の豊かさってというのはあるんだけど。なんかそれだけじゃないんじゃない？ 作品を作ることってそれだけで良いのか？ と思い始めて。私にとって作品を作ることって、出会いがすごく重要で。それは人との出会いだったり、場所との出会いだったり、言葉との出会いだったり、色んな出会いがあるんですけども。何か自分の中に生まれる。そうすると、とりあえず行ってみるとか、とりあえずやってみるってというのが今までの自分の作品の作り方だったのが、そういうことができない。人ともなかなか出会えない。人と出会っても話しかけづらいだとか、そういう中で作品を作ることの難しさを感じていました。不要不急という言葉も私にはとても重かったです。そんなこと言い始めたら、私のやってることは全部不要不急なんじゃないかと。飛ぶクジャクを撮りに行くとか、とぶ魚を撮りに行くとか。でもじゃあ本当に不要不急じゃないことっ

❖13 吉本ばなな (1964-)
東京都出身。小説家。『キッチン』(1987年)で第6回海燕新人文学賞を受賞。同書と『うたかた／サンクチュアリ』(1988年)で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。野口里佳の大学時代の先輩にあたる。

て何なんだろうかとずっとグルグル頭の中で考えていました。3年目になってようやく、ふわっとそこから抜けた感じがあったんです。先ほどお話しした消防署の映像は私が育った埼玉県で撮っているんですけど、埼玉って特別なものが何もないところなんです。とくに私の育ったさいたま市は海も山もないし。でもそういうところで私は作品を作り始めたんだなってことを思い出したんです。それでああ、私はいつのまにかすごく贅沢になっていたんだなって気づいたんです。海外に住んでた時期も長かったので、いつのまにか遠くに行くことが当たり前になっていた。けれど遠くに行かなきゃ作品が作れないのってどうなんだろうって、ようやく思えるようになった。コロナ禍にずっと考えていたのは宮沢賢治¹⁴さんのことでした。宮沢賢治さんはずっと岩手県の花巻にいて、近所の川辺をイギリス海岸と呼んでみたり、理想郷をイーハトーブと呼んでみたり。遠くに行かなくてもそんなふうに夢が見られるんだったら、私もそういうことをやるべきだとようやく思ったんです。知らないことはまだたくさんある。近所の川でも魚とんでたりするよね、みたいなこと、それが今私がやろうとしてることなんだなと思いついて、最終的にこの言葉を今回のカタログに入れました。

❖14 宮沢賢治 (1896-1933)
稗貫郡花巻川口町 (現岩手県花巻市) 出身。詩人、童話作家、教師、農業指導者など多彩な顔を持つ。生前に刊行された著作には『心象スケッチ 春と修羅』、『注文の多い料理店』(いずれも1924年)がある。

石田：はい。ありがとうございました。そろそろ質問の時間にした
いと思います。

撮ることと描くこと、住むところ、カメラについて

質問：ご自身の中では、写真を撮ることと絵を描くことは、どのよ
うに感覚が違うのでしょうか。

野口：私にとって絵は写真のことを考えている中で出てきたこと。
私の絵はやっぱり写真に付随する絵だなって思っています。絵の良
いところは、たとえば海の上をクジャクが飛んでいるときに、とん
でるボラと出会えるかもしれない。でもそれを写真で撮ろうとする
と難しい。ボラがとんでるところでさえなかなか大変だったので、
多分私の全生涯を使っても難しい。そこが私にとって写真の面白さ
でもあるんですが、でも絵だと出会うことがほぼ不可能な瞬間も描
くことができる。私の心の中にある絵って、こんな感じなんだよね、
というのをそのまま出してみたい、私の中にある絵をそのまま見せ
てみたいなという思いもあって、絵を描きました。あまり上手い答
えになってなくてすみません。

質問：これまでに色々なところに住まれていると思うんですけど
も、自分の住むところって今までどういうふうに決めてきましたか。

野口：自分で決めたことはあんまりなくて。自分が生まれ育った場
所っていうのは親が決めた場所なんです。埼玉で育って、その
あとアメリカに3年ほど住みました。それが唯一自分で選択して住
んだ場所ですね。作品を作り始めて、これから作品を作って生きて

❖15 島袋道浩 (1969-)
兵庫県神戸市出身。沖縄県那覇市在住。美術家。1990年代初頭より国内外の多くの場所を旅し、その場所やそこに生きる人々の生活や文化、新しいコミュニケーションのあり方に関するパフォーマンス、映像、彫刻、インスタレーション作品などを制作。

いきたくないなって思ったときに、どうやっていったらいいか分からなかった。その時にアーティスト・イン・レジデンスという、作家がそこに滞在して作品が作れるという環境があることを知って。それでアメリカのアーティスト・イン・レジデンスにアプライしたんです。結局そのプログラムには落ちたんですが、その代わり半年間招待しますと言われたのがニューヨークでした。そのあとオランダに居たんですが、それはたまたまニューヨークで出会った人がオランダに住んでいて、話を聞いているうちにぜひ行ってみたいというところからオランダに。そのあと日本に戻ってきてからは横浜に住みました。横浜に住んだのは空港に行きやすいとかそんな理由でした。そのあとベルリンに12年ほど住んでいたんですが、パートナーが^{❖15}美術家で、(彼が)ベルリンに招待されて、私自身も海外での活動が増えていたので、じゃあ次はそこでいいかとドイツに住み始めました。だから自分の意志でというより、大体何かがやってきたり、人との出会いとか、ちょっとしたきっかけで、自分の住むところを決めてきたんだなと思います。沖縄も、パートナーが自分のルーツである沖縄に住んでみたいという夢があったので、それを叶えているところです。

質問：《クマンバチ》は周辺光量がすごく落ちている写真なので、どう撮ったのか気になりました。こんなおかしなカメラを使っていると知って、びっくりしました。愛用しているカメラがあれば教えてください。

野口：私は割と色々なカメラを使っています。最初に使ったカメラはニコンのFMでした。その後ずっと使っているカメラはニコンのF3ですね。そのあとマミヤ6というプローニーの6×6のカメラも使っていました。〈潜る人〉という作品を作ったのはワイドラックスというカメラ。あと水中で撮った写真はニコノスという水中カメラです。《フジヤマ》はペンタックス645という中判のカメラで、最近ではオリンパスのペンFをよく使っています。でも最近だと胃カメラですね。胃カメラはコーワという製薬会社さんが作っていたカメラを使っています。

質問：デジタルカメラを使って作品を作る構想はありますか？

野口：映像作品はデジタルカメラを使っています。デジタルカメラで写真作品を作りたいなとはずっと思っています。まだその被写体に出会えていないという感じなのかなと思います。私の場合、自分とカメラの関係と、自分と被写体の関係、そして被写体とカメラの関係が良い形で結ばれたときに作品が始まるという感じがあって。そういった意味で「ああ、これはデジタルで撮らなければ」というものに出会える瞬間を待っている感じです。



図8 アーティストトーク会場風景
撮影：白石咲良 Photography: Shiraishi Sakura

人との接触

質問：〈潜る人〉では、被写体となったダイバーさんと実際にコミュニケーションを取られて写真を撮ったのですか？

野口：歩いているダイバーの方とはコミュニケーションは取れなかったです。話しかけようと思っていたら海に入って行っちゃったから、「あー」みたいになって。でも同じ場所をもう一度訪れた時に、あのダイバーの方を知っている方と出会って、その方から色々とお話を伺って、そこからダイビングのことをだんだん知っていきました。私が実際に海に潜って撮った写真があるんですが、そこに写っているのはその時ダイビングのことを教えてくれた方です。その方もプロのダイバーだったので、最終的にはその方からダイビングの指導を受けて自分で潜ることになりました。展覧会まで時間がなかったので、たくさんウエイトをつけて、潜るというよりは無理やり沈んだという感じでしたが。

質問：人との出会いが大事だとお話しされていましたが、写真を撮る上で人とコミュニケーションを取ることを大事にされていますか。

野口：私はポートレートをほとんど撮らないので、人との接触が苦手なタイプだと思われると思います。でも私自身はそういうつもりはなくて、たとえばダイビングを教わることになったダイバーの方からは色々な影響を受けて、作品につながっているなと思います。やっぱり生きていて、誰かと出会って、その人から聞いたこととかもらった言葉とかが最終的に作品につながっているなと思うので、人との出会いは私にはとても重要です。たとえばとぶ魚を探しているなかで、どんどん釣り人の知り合いが増えていくとか。

そういうことが私にとっては世界が広がっていくこと。カメラを持つことで普段は知り合わなかった人たちと知り合っていく。それが私にとって写真の面白さだなんていうふうに思っています。それは多分アトリエにずっといてはできないことだなと思うので。

石田：本日のアーティストトークを終わりにします。野口さん、ありがとうございました。

野口：どうもありがとうございました。

収録：2022年12月16日

会場：東京都写真美術館 2階ロビー

テキスト編集：石田哲朗（東京都写真美術館）、
室井萌々（東京都写真美術館インターン）

野口里佳（1971-）

埼玉県大宮市（現さいたま市）出身。沖縄県那覇市在住。1992年より写真作品の制作を始め、展覧会を中心に作品を発表。現代美術の国際展にも数多く参加している。2002年、第52回芸術選奨文部科学大臣新人賞（美術部門）を受賞。国内での主な個展に「予感」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2001年）、「飛ぶ夢を見た 野口里佳」（原美術館、2004年）、「野口里佳 光は未来に届く」（IZU PHOTO MUSEUM、2011-2012年）など。作品は東京都写真美術館をはじめ、東京国立近代美術館、国立国際美術館、グッゲンハイム美術館、ポンピドゥー・センターなどに収蔵されている。